

高知県の植物

【現 状】

高知県植物誌(2009)には、高知県に生育する植物として、変種を含め 3,170 種が記録されています。植物の分布は、気候や地形地質などに影響され、さらに人間の活動も大きな影響を与えています。高知県は、気候が温暖多雨のうえ、背後に四国山地があり、海岸から山地まで続く地形は急峻複雑で、その中には植物の生育に影響を与える蛇紋岩地帯や石灰岩地帯が含まれています。



写真1. 四国山地

このような多様な環境が、豊かな森や清流と共に多様な植物相を育んできました。海岸には、ハマカンゾウやノジギクなどが群生し、その背後の照葉樹林には、カンラン、エビネなどの地生ランやヤッコソウなどの寄生植物も見られます。また、温暖な足摺岬や室戸岬周辺では、アコウ、クワズイモなどの亜熱帯植物が茂ります。内陸部にはシイ類やカシ類、モミ、ツガなどの森林が広く分布し、標高 1,100m以上の山地ではブナの林が広がっています。岩場にはコウヤマキなど古い時代からの針葉樹が残され、谷には紀伊半島や九州南部と遠く中国大陸の一部にも離れて分布するキレンゲショウマのような、学術的に貴重な植物も生育しています。四国山地の稜線部はササ類の草原に覆われることが多く(写真1)、岩場ではアケボノツツジなどが彩り、石鎚山系の笹ヶ峰(標高 1,860m)では、愛媛県にかけて亜寒帯針葉樹のシコクシラベが生育しています。

高知県のみ分布する固有種^{こゆうしゆ}としては、トサミズキ、ショウロウホトトギス、ヤハズマンネングサ、トサノアオイの4種が知られています。これらの多くが蛇紋岩地帯や石灰岩地帯に限って分布しており、特殊な地質が高知県固有の植物を生んでいるといえます。

【変 化】

高知県の森林は県土の 84%を占めています。植物が生育するための環境に恵まれた高知県には、海岸から山頂まで、立地条件に応じた連続的で多種多様な自然植生が発達していました。しかしながら、戦後の拡大造林で 67%もの森林が人工林に置き換えられ、自然植生の大半が失われました。さらにその後の国産材価格^{げらく}の下落と山村の過疎化で、間伐が行われない人工林が増え、暗くて植物が生えない林が広がりました。一方、豊富にあったカンランやエビネなどが山野草ブームで乱獲され、海岸や河川では護岸工事に伴い在来植物の生育地が減少しました。平野部はもとより山間の田畑でも、農業の効率化の目的で土地改良事業が進み、畦などに生育していたヒメノボタンなどが生育地を奪われました。また、農山村を取りまく環境の変化によって、人の手が



写真2. キレングショウマ

加わらなくなり、雑木林や草地が減少し、ササユリなど明るい環境に生育する植物が減少しました。他方、蛇紋岩地や石灰岩地は、鉱物資源として採掘され、そこに生育していた貴重な固有種が絶滅の危機に瀕しています。さらに最近、このような事態に拍車をかけるように、わずかに残されていた自然林においても、ニホンジカによる食害が拡大して、ところによっては、高木も下草も枯れて、キレングショウマ（写真2）などの貴重な植物に壊滅的なダメージがみられるようになってき

ました。私たちにごく身近な市街地や河川の土手、道路沿いなどでは、オオキンケイギクなどの外来植物が在来種の生育地を奪って繁茂し、その範囲が加速度的に広がっています。

【人との関わり】

ここ数十年間の人の活動は、私たちの生活を便利で安全なものに変える反面、かけがえのない植物たちに様々な影響を与えて、絶滅が危惧される状態に追いつてきました。高知県のレッドデータブックでは、高知県に生育する植物のうち、4種に1種が絶滅の危機に瀕していることが明らかになっています。今や種の絶滅を防ぎ生物の多様性を確保することは、人類共通の緊急課題です。もう先送りはできません。生物多様性条約などの国際的な動きを受けて、日本でも様々な取り組みが見られるようになり、絶滅の恐れのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）や特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）などの法律の整備に加え、市民レベルの活動も広がりを見せています。

そのような中、高知県では、高知県植物誌の作成に向けた調査が、2001年から7年間実施され、総勢350人のボランティアによって県内の植物が調べ上げられました。その成果は高知県植物誌となりましたが、調査に参加した多くの人々が県土の植物に関心を持ち、その変化を知るきっかけとなりました。一方、ニホンジカの食害から植物を守るためのネット張りには毎回大勢のボランティアが参加しています（写真3）。

人にとって植物は生きる糧であり豊かさの源です。人間自らが招いた加速度的で大規模な植物の減少に比べて、その対応は鈍くて遅く局所的で、成果があがっているとは言えません。それでも今私たちは、人の輪を広げ、その知恵と行動で大切な植物をなんとか後世に残さなければならぬのです。



写真3. ニホンジカの食害から植物をまもる活動